

「つちのいえ」と水に沈んだ家について交差すること

川端あす香

「つちのいえ」の活動について振り返ると、同時期に経験した水害のことが頭に浮かびます。身の回りの素材を生かし、古い知恵を学びながら創造する「つちのいえ」と浸水した実家の後始末は別方向にありますが、日常が剥がれた時に見える物質の存在感について考えが交差します。

「つちのいえ」では解体される民家の土壁をハンマーで砕いて再利用したり、屋根に使う植物を鎌で刈って集めたりと、自分達で材料を調達します。硬く乾いた古い土は藁や砂、水を混ぜれば再び壁になり、野生のチガヤは職人の手で規則正しい萱葺きの屋根になります。単純な素材が人の手で美しく変換される瞬間を見る事が出来ました。

「つちのいえ」でお茶を飲み、人が集うと温かな空気が流れますが、一人で訪れる「つちのいえ」は生き物の様な気配がありました。物質としての存在感と家や道具としての日常性が常に揺らぎながら両立することの面白さと、それらを上手く繋ぐ知恵の仕事を体感しました。

一方、浸水した実家では生活の中で気配を消していた道具類が、泥にまみれた非日常として迫ってきました。水害で自分も周りも衝撃を受けていましたが、家の後始末には不思議と労働の明るさがあり、泥をかき出し汚れをはらっていくと、最後には家の構造がはっきりした輪郭で浮かび上がってきました。

生活に紛れている物質がある瞬間、美しく浮かび上がったたり、復讐がごとく異様に迫ってくる瞬間には非日常的な感動があります。出来れば美しく共存したいですが、まずは日常の表面下にある存在に自覚的でありたいですし、またそれらを生かす知恵について「つちのいえ」は非常に実践的な場であると改めて思います。

2011年より活動に参加

2015年3月 大学院日本画専攻修了

2016年3月 個展「私たちは永遠に繰り返す、東の間の夢を見る」/シャンティすぽっとギャラリー

2019年9月 「いい芽ふくら芽2019」八犬堂ギャラリー賞受賞/松坂屋名古屋店

2020年1月 個展「素と装い」/丸山雄進堂筆屋ギャラリー

その他グループ展等に参加



浸水した実家の後始末(2011年9月紀伊半島大水害)



つちのいえの中から撮影した作業中の萱葺き屋根